

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	河野 英二
論文題目	<p>„Geschriebene Schauspielkunst“ Die Performativität der Satire bei Karl Kraus und ihr historischer sowie sprachkritischer Hintergrund</p> <p>「書かれた演劇芸術」カール・クラウスにおける諷刺のパフォーマティヴィティとその歴史のおよび言語批判的な背景</p>
<p>審査要旨</p> <p>オーストリアの作家、諷刺家、詩人であるカール・クラウスの諷刺は、特定の人物や組織を攻撃するものではなく、それらの言葉を非難するものでした。これがクラウスの諷刺の特徴です。</p> <p>クラウスの批判的な手法は、書き言葉と話し言葉を単に理論的な対象としただけでなく、その具体的な使用法も対象としました。たとえば、問題となるのは日常的な言葉の使用法そのものです。攻撃する相手の言葉を使って、その人の考え方を暴き出しました、19世紀ウィーンの喜劇作家で役者でもあったヨーハン・ネポムク・ネストロイがそうしたように。</p> <p>クラウスは外から言葉と思想を観察しただけではなく、そのシステムを操作しそして解体しました。この方法がジャック・デリダの脱構築という手法と類似性を持つと、論者は主張します。</p> <p>クラウスは自分の批判的な手法を「書かれた演劇芸術」と名づけました。文字を書くことと声を出すことを交錯させた手法を、彼は自分の様々な作品のなかで示しています。たとえば批判的な記事、箴言、演劇において、そして特に悲劇『人類最期の日々』においてです。以上のことが一つの理由となつて、今日では国際的な研究のなかでいろいろな角度からカール・クラウスの作品が論じられていますが、そのもう一つの理由は、彼が知的な最前線で孤高の闘争者として活躍したということです。その例をいくつか挙げてみましょう。彼は強大な新聞メディアを攻撃する一方で、自分自身の個人雑誌『炬火（Die Fackel）』を発行し、ほとんどすべての記事を自分で書きました。またクラウス自身がユダヤ人家庭の出身だったにもかかわらず、大部分がユダヤ人によって経営されていた有名なリベラル系の「自由新報（Neue Freie Presse）」という新聞を激しく批判しました。彼はシオニズムにも反ユダヤ主義にも反対しました。さらにまた彼は比較的伝統的な詩を書きましたが、文学的なアヴァン・ギャルドも支持しました。何人かの文学者に対してはそれまでの評価を大きく転倒させました。たとえばハインリヒ・ハイネのような詩人に対しては高い評価を下げ、ネストロイのような人物に対してはそれまでにない高い評価を与えました。</p> <p>河野氏はクラウスのこのような言語批判的な諷刺の独自性を明らかにするために、今日非常に議論されている「パフォーマティヴィティ」という概念を使っています。パフォーマティヴな発言で問題となるのは誰が誰に対してどのような言葉の力を及ぼすのかということです。この力は意味の伝達もしくはコミュニケーションの次元を超えたところで作用するものです。フィルムやグラモフォンによってすでに部分的には記録されていたクラウスの朗読活動と執筆活動の関係は、今までほとんど研究されていませんでした。それを可能にしたのは、パフォーマティヴィティの概念の導入だと思います。これは後世の理論が、明らかにされていなかった過去の問題を解明することに役立つ好例だと考えられます。パフォーマティヴィティの観点のもとにカール・クラウスにアプローチしようとする河野氏の試みは、極めて独創的です。私が思い当たる限りでは、1970年代にフランクフルト学派のヘルベルト・マルクーゼがパフォーマンス理論の源流となったオクスフォードの日常言語派哲学とクラウスの言語批判との類似性を示唆しただけです。マルクーゼによればクラウスの方法の方がオクスフォー</p>	

ド派よりもっとラディカルでした。クラウスはそのような日常言語の内的な分析をつうじて道徳的および政治的なシステムの正体を暴露しようとしたのです。

パフォーマティヴィティは、分析哲学の考え方を社会的・文化的な分野に拡張したものです。それによって社会的あるいは文化一般の行為形式や広い意味での儀礼も解釈できるようになりました。

河野氏はこれまで書いた論文を単にまとめただけでなく、従来の論文を分解し、新しい考えと結びつけ、今回の提出論文全体で一貫した論証を展開しています。私たちの見るところ、河野氏の問題設定は極めて明白であり、論証も首尾一貫しており、破綻がありません。

論文の第2章では、クラウスとハイネの関係について述べられています。クラウスは自分の文章の書き方をハイネに対するポジティブな反対例と考えていましたが、同時に彼はハイネをライヴァルと見なしていたのです。河野氏はこの第2章でクラウスがハイネの書き方を批判的に継承して、自らの言語批判的方法を発展させたことを示しています。第3章はそれまで過小評価されていたネストロイに対するクラウスの再評価に向けられています。自らの言語批判的方法を「書かれた演劇芸術」と呼んだカール・クラウスは、自分をこの諷刺劇作家の後継者とさえ見なしていました。河野氏は、クラウスがネストロイに関するエッセイのなかでいわば暗示的に展開した諷刺理論を分析していますが、その分析がきっかけとなって、クラウスの言語批判的な諷刺を今日のパフォーマンス概念によってより良く把握できるのではないかという可能性に思い至ったのです。その意味で第3章は本論文の理論的支柱をなすものと言えます。第4章の最大の功績は、同時代には大きな影響力を持っていたにもかかわらず、これまでの研究では軽視されてきたクラウスの朗読活動に注目し、書かれたテキストと同等の価値をそれに与えた点にあります。第3章が方法論上の核をなすとすれば、最後の第5章は現代の記録演劇のさきがけとなる反戦劇『人類最期の日々』を手がかりにして、狭義のパフォーマティヴィティが文献学的に検証されているという点で、本論文の主題上のクライマックスと言えましょう。

河野氏は最新の研究成果を取り込むことによって、国際的な研究水準にまで論文の質を高めました。大変な努力の成果だと思えます。

公開審査会において河野氏は、主査・副査からの質問に的確かつ具体的に応答しました。たとえばクラウスの言語批判的な諷刺が後世に及ぼした影響に関する質問に対しては、オーストリア現代文学に与えた決定的な影響力が指摘されました。さらに文化人類学、演劇学、文学研究などさまざまな学問領域で使われるパフォーマティヴィティ概念が、どのように本論文に取りこまれているかが議論されました。最後にアメリカのパフォーマンス理論家ジュディス・バトラーに対して河野氏がどのような評価を与えているかが、批判的に問われました。質疑応答は主としてドイツ語で行われました。400頁を超える大作をドイツ語で執筆した河野氏の業績を、審査員一同が賞賛いたしました。

全体として、主査・副査ともに口頭試問の結果に満足し、全員一致して河野氏の論文を博士学位論文にふさわしいものと判断した次第です。

公開審査会開催日	2009年 9月 25日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学・教授	Dr. phil. (文学博士)	Eーバールト・シャワイル
審査委員	早稲田大学・教授		村井 翔
審査委員	早稲田大学・名誉教授	Dr. phil. (文学博士)	ギョルター・ツォーベル
審査委員	慶応義塾大学・教授	Dr. phil. (文学博士)	ヨーゼフ・フルンカース